第１回文化プログラム検討部会　発言要旨

三好勝則

東京オリンピック･パラリンピックの文化プログラムを考えるに当たっては、2020 年及びそれ以後の東京（及び日本）の抱える課題は何か、文化プログラムがその課題にどのような解決策を授けることになるのかを考えておく必要がある。

大きな課題は３つあると思う。まず第一は、少子化と人口減少である。東京都及び区部では２０２０年頃が人口のピークで以降は減少傾向、多摩･島嶼部ではそれより早く人口が減少すると推計されている。人口の減少と少子化は、消費の減少や効率性の低下などによる経済活動の停滞、競争力の低下（例えば進学や就職での競争がなくなる）、インフラの余剰など様々な分野で問題を発生させる。第二は、本格的な高齢社会への対応である。寿命が延びることは個人にとっては好ましいことであるが、社会全体としてみると医療や介護の負担、地域の活気などの課題を抱えることになる。第三に、戦後半世紀以上かけて行われてきた社会基盤の整備が再考の時期を迎えることである。各種施設の老朽化、成長を前提とした制度の限界などが顕在化する。

これらの課題に芸術文化がどのように貢献が出来るか、芸術文化は人が行動し生活するために不可欠であることの再認識ができるか、その答を文化プログラムが提示することが、文化プログラムの意義であると考える。

そこで具体的にいくつか内容を挙げてみる。

まず、少子化、人口減少についてである。小さく内に閉じこもることによって活気をなくすことが懸念される。むしろ目を開いて世界を見ることで、新たな活路を見いだす、そういう気合いを身につけることが重要である。国際社会で活動できるような子供や若者を増やしていくことである。芸術家が海外に出て活動できる環境を整えること、国際性を身につけた芸術家が、東京で世界の人と一緒にフェスティバルを行う、そういうプログラムがまずある。芸術文化活動を支援しているアーツカウンシル東京としても、国内外の関係者とのネットワークを構築して、こうしたプログラムの実現と内容の充実に寄与していくことができる。芸術家に限らず、海外に出て活動しようとする経済人、研究者、外交官などが、日本の優れた芸術文化を伝統から現代まで幅広く知り、海外に紹介できるようにすることも、必要である。人材育成の一環として、芸術文化に関する素養を身につ

ける機会を提供することがプログラムとして必要である。

第二に、高齢者についてである。ロンドン大会では「アンリミテッド」プログラムが成功し、東京はこれを継承することを宣言している。障害者に加えて、高齢者なども文化プログラムの対象とする。高齢者にとって芸術は感情を伴った行動の場となる。一例を挙げれば、「演劇ワークショップの活用」がある。これは都内の劇団が手法を開発して、高齢者施設で既に実施しているものである。施設に入居している高齢者が、演劇のワークショップを行うことで、身体を動かすだけでなく、感情を伴った自発的な動作をし、次の行動を考え、会話をするという、高齢者が忘れていた、あるいは忘れがちな「感じ、考え、伝え、行動する」ということを呼び起こし、脳や身体が活性化し、老化の進行を遅らせ、心身の健全性を取り戻すことが期待できる。医学的な観点からの協力があれば、さらにその内容を深化できる。このような取組を東京全体、ひいては全国で展開し、オリンピック･パラリンピックの文化プログラムとして一斉に行うことが考えられる。また、元気な高齢者が中心となる活動も行われており、さらなる拡大もできる。

三点目の社会基盤についてである。2020 年に向けて、スポーツ競技施設の大規模改修や新設が予定されている。文化施設については、改修などを行って多くの来場者が楽しめる環境整備は必要である。あわせて、文化施設相互のネットワーク、共通パスなどが寄与できる。また、これからは新たな施設を造るのではない、新たな芸術文化の「場づくり」を考える必要がある。東京の各地に、近現代の風情を醸す魅力的な場所が数多くある。アーティストが場所を選んで、芸術文化の場として利用する、また、地域の人達が一緒になって行動する、そのための環境整備も必要である。これまで制約条件となってきた交通の規制や施設の目的外使用規制を弾力的に解除することなどが挙げられる。文化プログラムとして組み入れることによって、関係者の理解、合意も得られやすくなる。

最後に、東京オリンピック･パラリンピックの文化プログラムは、芸術文化の多様性と固有性を再確認する機会とすることである。世界における日本の位置を芸術文化を通して見ることができる、そういう機会である。アーティストはもとより、より多くの人が芸術文化の意義に気付くための大きなステージとしていくことが重要である。

以上、文化プログラムを考える基本的な視点を踏まえて、思っていることを述べました。